

【論文】

『伊勢物語』二十三段の教材研究（一）
——本文の注釈と論点の分析——

（二〇一九年九月二十六日受付、二〇一九年十二月十六日受理）

井上 次 夫

Textbook Research for Chapter 23 of the *Tales of Ise*:
Analysis of Annotations and Topics in the Main Text

Tsugio INOUE

（Received : September 26, 2019, Accepted : December 16, 2019）

要 旨

新高等学校学習指導要領（二〇一八年三月告示）の国語科において、ジャンルとしての古典を主教材とするのは共通必修教科目「言語文化」と選択科目「古典探究」である。この二科目は、生徒が主体的・対話的に自分や社会との関わりの中で古典を解釈し、自らの考えを形成し、人生に生かすことを重視した学習指導を求めている。その実現に向けて、高等学校の国語教師は従来の教材研究をいっそう深化させなければならない。そこで、本稿では『伊勢物語』二十三段「筒井筒」章段を例に、先学の古注釈及び諸論考を吟味しつつ、アクティブラーニングを視野に、授業において核となる論点を導出し分析を行う。同時に、古典の授業における「主体的・対話的で深い学び」につながる言語活動を考案するために必要な視点を明らかにする。

キーワード：伊勢物語「筒井筒」章段 教材研究 アクティブラーニング

abstract

Under Japanese language teaching in the new Course of Study for High Schools (announced in March 2018), “Language and Culture” and “Classical Exploration” are the subjects to use classics as a genre as

primary teaching materials. In these two subjects, the focus of teaching is to have the students independently and dialogically interpret classics in the context of their involvement with society as well as form their own thoughts and apply them in their lives. To do this, teachers must deepen their textbook research. As such, this paper examines Chapter 23 of the *Tales of Ise*, organizing, analyzing, and discussing the annotations and topics of the textbook main text, with an eye to active learning, while also scrutinizing the annotations and discussions of scholars in the past. This should provide motivated high-school Japanese language teachers with hints for coming up with language activity examples to facilitate “independent, dialogical, and deep learning” when studying classics.

Key word: *Tales of Ise*, Tsutsuizutsu chapter, textbook research, active learning

高知県立大学文化学部教授

Professor, Faculty of Cultural Studies, University of Kochi

はじめに

新しい高等学校学習指導要領が二〇一八年三月に告示された。国語科では科目の再編が行われ、共通必修科目「現代の国語」「言語文化」と選択科目「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」の構成となっている。その中で古典文学を主教材とする科目をみると、「言語文化」と「古典探究」である。前者は、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置く科目である。後者は、それを受けてジャンルとしての古典を学習対象とし、古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤となる古典の重要性を理解し、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視する科目である^①。

従来、高等学校国語科の古典（古文）教育においては、古語、古典文法、現代語訳を中心とする正確な読解指導への偏重、それによる生徒の学習意欲の低下といった課題が指摘されてきた。このため、「言語文化」「古典探究」では、生徒が自分や社会との関わりの中で古典を解釈し、自らの考えを形成し、人生に生かしていくという観点を重視した古典指導を求めているのである。また、「主体的・対話的で深い学び」は古典教育にも要請されており、それを実現する方途としてのアクティブラーニングに加えて、言語活動を重視した授業への転換とその充実が必要な状況になっている。したがって、高等学校国語科教員には確かな教材研究がこれまで以上に重要となることはもちろんであるが、それは訓詁注釈を基盤としつつも、教材の分析・解釈において新たな論点を発掘し、分析する視点を持ち、かつ新たな指導法を開拓する視野を持つものでなければならない。そこで、本稿では、そのような教材研究の実践例として『伊勢物語』二十三段を二回にわたって取り上げ、教科書教材の本文を対象としなが

らも、新旧の注釈書にも目を配り、先学の諸論考を吟味しつつ、論点を整理・分析し、見解を述べる。

一 教材本文

教材研究の対象は、「国語総合」の現行教科書のほぼすべてに掲載されている『伊勢物語』二十三段、いわゆる「筒井筒」章段である。ここでは手元の大修館版『国語総合改訂版 古典編』（二〇一七年）の教材本文を示す。便宜上、数字は筆者が付した。

一(1) 昔、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて、遊びけるを、おとなになりなければ、男も女も、恥ぢかはしてありけれど、男は「この女をこそ得め。」と思ふ。女は「この男を。」と思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなむありける。

(2) さて、この隣の男のもとより、かくなむ。

筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに女、返し、

くらべこし振り分け髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべきなど言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。

二 さて、年ごろ経るほどに、女、親なく、頼りなくなるまに、「もろともにいふかひなくてあらむやは。」とて、河内の国、高安の郡に、行き通ふ所出で来にけり。さりけれど、このもとの女、「あし」と思へる気色もなくていだしやりければ、男、「異心ありて、かかるにやあらむ。」と思ひ疑ひて、前栽のなかに隠れあて、河内へいぬる顔にて見れば、この女、いとう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みけるを聞きて、「限りなくかなし。」と思ひて、河内へも行かずなりにけり。

三(1) まれまれかの高安に来て見れば、初めこそ心にくくもつくりけれ、

今はうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のうつはものに盛りけるを見て、心憂がりて、行かずなりにけり。

(2) さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも

と言ひて、見いだすに、からうじて大和人、「来む。」と言へり。喜びて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経ると言ひけれど、男住まずなりにけり。

以下、単元の指導計画の立案を念頭に、教材紹介の部分から検討を始め、本文の分析を段落ごとに進めていく。

二 導入部

古典(古文)の指導計画における導入部の授業では、通常、作品・作者の解説を行い、音読、舞台設定、文章構成などを指導する。

(一) 作品解説

『伊勢物語』についての説明をみると、例えば、先の大修館版教科書では次のように紹介している。

歌物語／平安時代前期。原形は一〇世紀初めまでに成立。現在の形になったのは一〇世紀の中頃。在原業平の歌を中心に、約一二五段から成る。業平と思われる男を主人公として、一代記風に構成されている。▼作者―未詳。▼出典―本文は、『新編日本古典文学全集』によった。

この紹介の冒頭にある「歌物語」に関して、文学ジャンルの観点から既習教材の「竹取物語」が作り物語であること、文学史の観点からは作り物語や歌物語が長編物語『源氏物語』へと結実することを解説する。また、以後、教科書に登場してくる教材の「平家物語」が軍記物語、「大鏡」が歴史物語であることについても触れておく。

作品の成立時期は、古典文学の場合、一般に、時代区分(例…中古文学、平安時代前期)、世紀(例…一〇世紀中頃)、必要に応じて西暦との対照や成立の前後関係(例…伊勢物語→大和物語)の面から解説し、生徒の理解を促す。その際、教科書付録や国語便覧の古典文学史年表などの活用が効果的である。

次に、『伊勢物語』の成立過程についてみると、古典文学作品にしばしば見られるように、「原形」があつて、それが複数の享受者によって増補・改作・改編が繰り返されて現在の形になったものと考えられる。したがって、現代の文学作品の成立と同じ感覚で、例えば、在原業平や紀貫之といった特定の人物が、ある一時期に、すべてを書き上げて『伊勢物語』を完成させたものと思ひ込ませないように留意する必要がある。その点で、紹介の後半で、作者を「未詳」としていることには注目したい。「未詳(未だ詳らかならず)」の語に対し、「不詳(詳らかならず)」や「不明(明らかならず)」の語を取り上げて比較しながら解説することは有用

である。^②一方で、『伊勢物語』の主人公については、六歌仙の一人である在原業平（八二五～八八〇）がモデルであること、業平の和歌を中心にした短い物語がいわゆる原『伊勢物語』になっていることを補足説明する。紹介の最後にある出典部分からは、古典文学作品における異本の存在や学問的良心を指導する機会とすることができる。^③なお、書名の由来については諸説あるが、第六九段に拠るともされていることから、その内容については確認しておく。

（二）舞台設定

物語の舞台となる「時」は「昔」である。「昔」とは、二十三段の執筆時を基準とするそれ以前で、初冠本伊勢物語の場合、平安朝初期（遷都間もない頃）から仁和年間（八八七年）頃までである。^④「場所」については第一段落からは「田舎」「井のもと」であり、第二段落で「河内の国、高安の郡」「たつた山」、第三段落で「大和」「生駒山」の地名が登場する。次に、「登場人物」であるが、第一段落からは「田舎わたらひしける人の子ども」（複数）「男」「女」「まろ」「妹」「君」「親」であり、第二段落以降で人物呼称を挙げると「もとの女」「この女」「かの女」「大和人」である。各呼称が表す人物がそれぞれ誰なのか、どのような人物関係なのかについて問題提起し、可能なところまで明らかにする。不明な点が残った場合、以後の学習で明らかにすることを伝える。ただし、少なくとも登場人物は何人か、人数だけは確認しておく。

（三）文章構成

文章構成は、一般に、物語における時間の推移、場所の転換などに着

目して考えさせる。本章段は、三段落構成として扱うのが通例である。一方、場面を重視すると、次のような三段落、五場面の構成を考えることができる。^⑤

- 一 A (1) 昔、田舎わたらひしける人の子ども、聞かでなむありける。
- A (2) さて、この隣の男のもとより、本意のごとくあひにけり。
- 二 B さて、年ごろ経るほどに、河内へも行かずなりにけり。
- 三 C (1) まれまれの高安に、心憂がりて行かずなりにけり。
- C (2) さりければ、かの女、大和の方を、男住まずなりにけり。

また、この三段落は、A（発端）、B（展開→山場→結末）、C（後日譚）、と捉えて指導することも可能である。

ただし、教科書の中には第三段落（C後日譚）を割愛し、第一段落（A）と第二段落（B）だけを採録するものがある。この点について、それは本文の改変行為であり、その改変に連動して「筒井筒」章段の主題が幼い頃からの恋を成就させ、お互いがその純愛を守りきったことへと純化されてしまう点を問題視する見解がある。^⑥

三 展開部（第一段落）

（一）冒頭「昔、田舎わたらひしける人の子ども」

当時の物語は、冒頭で舞台となる時代や登場人物、主人公を具体的に紹介するものが多い。しかし、『伊勢物語』の語り出しは「昔、男」とだけ言うのが特徴で、^⑦事実、「昔、男」で語り出す章段は全一二五段のうち七四段、約六〇%を占めている。そして、その「男」の住まいは、ほとんどが京である。京以外では、武蔵（一二三段）、長岡（五八段）、津の国菟原の郡、^⑧蘆屋の里（八七段）、みちの国（一二五段）である。このため、

二十三段の語り出しが「昔、男」ではなく、「昔、田舎わたらひしける人の子ども」であることには注意を要する。また、「男」の住まいについては「ゐなか」とされるだけで具体的な地名は示されない。それが、第三段落で初めて「男」は「大和の方」に住む「大和人」であることが判明する。⁸⁾「大和（今の奈良県）」は『伊勢物語』において「津の国菟原の郡（三三・八七段・兵庫県芦屋市付近）」や「長岡（五八段・京都府長岡京市）」とともに「ゐなか」である。そこで、仁平道明氏の論考に基づけば、「大和」という「ゐなか」で「わたらひしける人」とは、京を離れあるいは土地の者と婚姻し、あるいは農業や商業を営んで、都の外の畿内諸国に住みつき、土地の者と同様の生計のたてかたをしていた、京を本貫とする一般人および王臣の子孫ということになる。⁹⁾その「子ども（複数）」が第一段落の「男」と「女」なのである。

（二）物語絵の活用「井のもとに出でて、遊びけるを」

教科書には、通常、本章段に關係する物語絵が挿絵として掲載されている。その多くは第一段落の「筒井筒」の物語絵だが、第二段落の「龍田山図」、第三段落の「河内の女」の場合もある。『伊勢物語』の物語絵については、『源氏物語』総合巻に「伊勢物語に正三位を合はせて」とあり、藤壺の御前で二つの物語絵（伊勢物語と正三位）の優劣を争う場面が描かれている。また、総角巻に「在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたる「筆者注」『伊勢物語』第四九段の場面」を見て」とあることから、その存在が確認される。このように、「伊勢物語」は成立の当初から物語絵とともに鑑賞されてきたと思われるのである。ただし、現在確認できるものは、古いもので鎌倉時代作の『梵字経刷白猫伊勢物語絵巻』及び『和泉市久保惣記念美術館本伊勢物語』であり、鎌倉末期

ないし南北朝時代の絵巻の姿を伝えている江戸時代後期の模本『異本伊勢物語絵巻』（東京国立博物館蔵）を始めとする室町時代後半以降の絵巻絵本である。¹⁰⁾

さて、窪田裕樹氏によれば、「筒井筒」の物語絵の図様を分析すると、嵯峨本『伊勢物語』（国会図書館蔵、一六〇八年）以前の絵巻絵本には若い男女の子ども二人がお互いを見合っている構図が多いのに対し、それ以後は二人が井戸をのぞき込む仕草（水鏡）の構造を持つ絵が見られ、これは嵯峨本『伊勢物語』にある「筒井筒」の物語絵が能（井筒）の影響下で成立したものであることを示すという。そこで、窪田氏は、東京書籍版「国語総合」教科書で同一ページ内に平安時代に成立した『伊勢物語』の本文と中世の『伊勢物語』理解から生まれた能（井筒）の影響を受けた挿絵が併存していることに注目し、古典文学の享受史をたどる授業を構想し、その授業実践を報告している。¹¹⁾

（三）係助詞「こそ」「なむ」「か」

古典文法の重要な指導事項の一つに、係助詞の「こそ」は文末を已然形、「ぞ」「なむ」「や」「か」は連体形で結び、「こそ」「ぞ」「なむ」は強意を表し、「や」「か」は疑問・反語を表すという係り結びの法則がある。

例えば、第一段落の「この女をこそ得め」を対象に係り結びの法則を解説する際、¹²⁾板書は図1のようなものになることが多い。これは静止的指導法の代表的なもので、古文を所与の対象として受け取り、読み手の立場で理解しようとするものである。



図1

しかし、古文を読み対象ではなく、古文の書き手の立場になって、その文を書き連ねていく過程を逐次たどる中で文法現象を追っていくアプローチがある。これによれば、「この女をこそ」と記した時点で、書き手の脳裏には文末は「得む（終止形）」ではなく、「得め（已然形）」とする準備ができていた。換言すれば、「得め」と已然形で結ばねば結びようのない観念（文法）が基底に存在していたと考えるのである。このような力動的指導法によると、板書は図2のようなものになる。¹⁵⁾

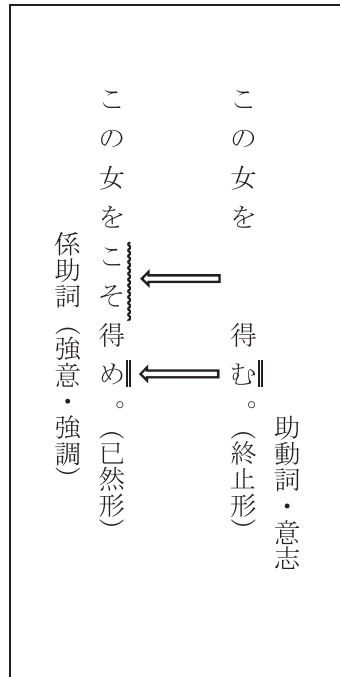


図2

次に、「女は、「この男を。」と思ひつつ」の部分を見よう。通常の指導では、「この男を。」の後に省略されている表現を考えさせ、幼なじみの男女が互いに強く「得（＝結婚する）」ということを心に決めていることを確認する。なお、「この男を。」に続く省略部分を考えさせる際は、次のような板書（図3）が有効である。

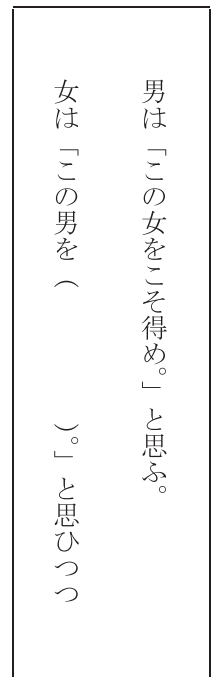


図3

また、後に、第一段落(2)末尾「本意のごとくあひにけり。」の部分で、「本意」の内容を考える際には、係り結びを含むこの二つの部分が該当することを改めて指導することになる。

さらに、係り結びの法則を形式的な文法知識にとどめず、係助詞やこの表現の意味・用法、効果についても指導する。¹⁶⁾ 他方、「結びの省略」について、「（女は）この男をこそ得め。」と繰り返し言うべきところを、上に「（男は）この女をこそ得め。」とあつてそれで了解できるので、後をはつきり言わずに含ませた。それにより、恥じらいのある女の気持ちの表現ともなっていると見る見解は表現面からの心情解釈として参考になる。¹⁵⁾

続いて、第一段落(1)の末尾「親のあはすれども、聞かでなむありける。」の部分に登場する係助詞「なむ」についてみる。

山口仲美氏によれば、『伊勢物語』の章段における係助詞の中では「なむ」の使用率が高い。そして、「なむ」は平安時代、日常会話でよく用いられる語で、現代語の間投助詞「ネ」「サ」に近く、例えば「むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。『伊勢物語』第四〇段」の場合、「昔の若者は、こんな一途な恋をネ、したんだそうだ。」と相手に語りかける口調で現代語訳できるといえる。¹⁶⁾ この係助詞「なむ」の口調を生かして「聞かでなむありける。」を現代語訳すると、「（女は親が勧める縁談を）聞き入れようとはネ、しなかったんだそうだ。」となる。

また、第一段落にはもう一つ「この隣の男のもとより、かくなむ、」の部分に係助詞「なむ」が登場している。これも「結びの省略」の例であ

り、指導しておく必要がある。そこで、その省略部分を考えさせるために、ここでは和歌の前後の動詞に注目させてみる。本章段内では「くらべこし」の歌の後に「など言ひ言ひて」、「風吹けば」の歌の後に「と詠みける」、また、第三段落の二首の歌の後に「と言ひ」とあることから省略部分の候補として動詞「言ふ」「詠む」を指摘する。これに『伊勢物語』の他の章段（十一段他）の使用例から「言ひおこす」を加えて、次のような板書（図4）を用いると、係り結びの法則についての理解を促し、定着を図ることができる。

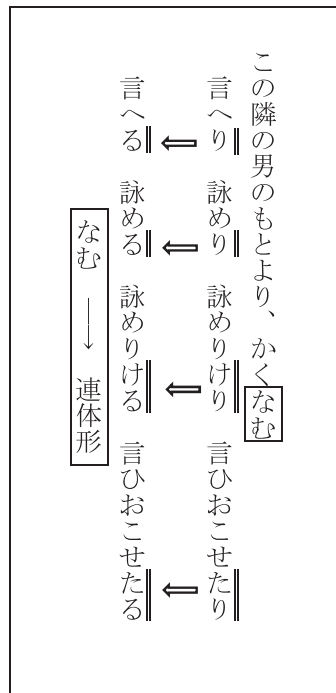


図4

さて、係助詞「か」は男の歌「くらべこし振り分け髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき」の下の句に用いられている。「か」は、不定詞N（たれ・なに・いつ・いづこ・いかに・いかほど等）の下に付いて、仮に不定詞によって未確定に表しておくけれども、実はその対象の特定（解答）を欲して、心中あれこれと自問するものである。しかし、これが相手との対話の場に持ち出されると、相手（答え手）は、Nに該当すべきものを選んで、それと答えることになり、これが話し手自らの解答の正当さを強調することになる。¹⁷すると「くらべこし」の歌は、下の句で、女は誰かが自身の髪上げをすることを前提として、「あなたではなくて、誰が私の髪上げをするでしょうか。」と自問形式を取りながら、「髪

上げをする人はあなた以外に誰もいない」こと、つまり、髪上げをする「たれか」とは「あなた」であることを強調していると解釈される。言い換えると、女は「誰が私の髪上げをするだろうか（自身の疑い）」を「あなた以外の誰が私の髪上げをするだろうか（相手への問い）」と表現した際、そこには「あなた以外の誰も私の髪上げをしないだろう」が内心に用意されており、当然、それに対して相手である隣の男から返ってくるはずの「あなたの髪上げをするのはほかならぬ私です」という返事を期待し、その正当さを強調しているのである。

ところで、係り結びの法則の形式面の練習の一つとして、下の句「君ならずしてたれかあぐべき」から係助詞「か」を取り除かせてみる。そうして、「君ならずしてたれあぐべし」となったところで、「あぐ」の主語が「たれ」であり、実質上、隣の男であることを確認する。¹⁸このことから、本稿は、新注の『伊勢物語古意』（賀茂真淵、一七九三年）の「髪あげしつべきを、こは君にこそあげさせめ、誰にかはとおもふと也。」の解釈を支持する。¹⁹ただし、この下の句について、大修館版教科書の脚注をみると、「あなた（のため）ではなくて誰が髪上げをしましょうか。」としている。そこで、仮に括弧内のように「あなたのためではなくて」と訳してみると、「髪上げをする」の主語が「たれ（誰が）」であることに変わりはないが、その人物は隣の男ではなく、歌の詠者、つまり、「女」になる。

（四）男と女の贈答歌二首

ここでは、幼なじみの男からの贈歌とそれに対する女の返歌の内容、構成について整理を行う。

筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

男はこの贈歌で、幼い頃、女と一緒に遊んだ共通の思い出の場所である「筒井筒」を初句に置き、「井筒」に自身の「たけ（背丈）」を測り比べた過去の経験を持ち出す。そして、その「たけ」が自身の成長とともに「井筒」の高さをもう「過ぎ（越え）」てしまったようだなあ、「妹見ざるまに（あなたに会わないうちに）」と詠んで、「おとな（成人。つまり、結婚できる状態）」になった今、暗示的ながらも女への求愛の意思を伝える⁽²⁰⁾。

くらべこし振り分け髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

これに対し、女は返歌で、男の上の句を受けて、幼い頃、あの「筒井筒」の辺りで男と「振り分け髪」を比べ合ってきた過去の共通経験を持ち出す。そして、男の「たけ」が「井筒」を「過ぎ」てしまったのと同じように、私の「振り分け髪も」その長さが自身の成長とともに肩を「すぎ」てしまった。そして、「おとな」になった今、「君（あなた）」でなくていったい誰が私の髪上げをしようか、髪上げをするのはほかならぬあなたなのです、と女は、明確に男との結婚への強い意思を示す⁽²¹⁾。

以上の男と女の贈答歌二首の呼応関係について、語彙の面からみると、身体の「たけ―髪」、それぞれを比較する基準「井筒―肩」、相手に対する呼称「妹―君」、類義・同義語「かけ（かく）―くらべ（くらぶ）」「過ぎ（過ぐ）―すぎ（すぐ）」、文法面では、過去の助動詞「し（き）」と完了の助動詞「に（ぬ）」、打消の助動詞「ざる（ず）」の使用、表現法の面では「倒置―反語」による強調を挙げることができる。

これら語彙面、文法面、表現法面を関連付けて解説しながら作成した板書例を図5に示す。

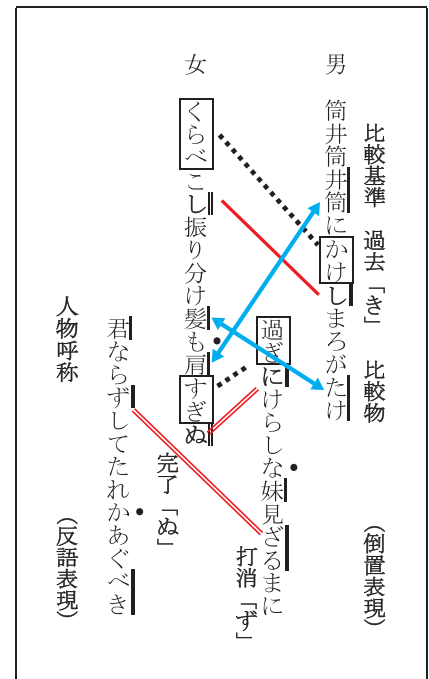


図5

（五）第一段落の位置づけ

昔、井戸の辺りで一緒に遊んでいた幼なじみの男女が、その成長とともにいつしか互いを異性として意識するようになった。初恋である。そして、今や背丈も髪の長さも伸びて大人になった二人は、互いに互いを心の中で結婚相手と決めている。相思相愛の仲である。しかし、これを知らない女の親は適齢期を迎えた娘に縁談を持ちかけるが、女は拒み続ける。そうこうするうちに、男から女のもとに求愛の和歌が届く。女は応諾の和歌を返す。このような和歌の贈答を続けた結果、二人はかねてからの願い通り結婚した。

以上のように、第一段落は幼なじみの恋の成就、相思相愛の初恋の成就を描き出している。この一段落を先学の諸論考に基づき位置づければ、第一段落には二人が築き上げていった関係性や互いを思う純粹で強い愛情が端的かつ綿密に描かれており、これが、この後に続く物語の展開を意味づけることになる⁽²²⁾。換言すれば、第二段落の男女両主人公の物語的存在を支える前提が、第一段落、いわゆる「たけくらべ」の箇所に

において強力に物語化されている。⁽²³⁾つまり、『伊勢物語』の書き手にとって第一段落は、次の第二段落を文学的感動で盛り上げるための序曲として位置づけられるのである。⁽²⁴⁾

四 展開部（第二段落）

(一)「もろともにいふかひなくてあらむやは。」の解釈

男の思いを表す「もろともにいふかひなくてあらむやは。」の解釈に基づいて行われる男への評価は必ずしも一通りではない。その一通りとは、「女の親が死亡して生活の拠り所がなくなると、あれほど相思相愛の中だったはずの女を見限る」、あるいは「女の親が死んで生活の拠り所がなくなったから女を捨てる。(中略)小さい男、つまらない男である」といった「身勝手でひどい男」観である。⁽²⁵⁾また、既に指摘があるように、⁽²⁶⁾現行の注釈書の多くが、女のほうでは親がなくなり、暮らしむきがおぼつかなくなるにつれて、男はこの妻とともに貧しいあわれなさまでいてよいものかと思つて、河内国高安の郡に、新たに妻を設けて行き通う所ができたとする。つまり、男は、妻の実家に経済面で依存していたため、妻の親の死によつて生活が苦しくなると、この妻と一緒に貧乏暮らしをするのを嫌った。そして、妻を見棄て、自分だけよい暮らしをするために、新しい妻を高安郡に求めたと解釈するのである。

これに対し、「自分たちのおちぶれた生活をたてなおすべく奔営する夫」や「妻の財力の欠乏に嫌気がさしたのではなく(中略)ともに現在の乏しい生活を切り抜けていこうとする女への愛情から発し、はからずも逸脱したものであり、要するに妻への愛情に変わりはない」といった見解に通じる「思いやりのある男」観がある。これは、夙に『伊勢物語』

の注釈史において見受けられる解釈である。例えば、青木賜鶴子氏によれば、旧注の『伊勢物語肖聞抄』(牡丹花肖柏)に「男女共にかやうにたづきなくてありへんもいかゞとて、をのくいかやうにもしかるべきかたになりなんと云心也。(中略)此段の心も業平の心浅きにはあらず、女を憐愍^レのこゝろなるべし。」とあるのを受け、宗祇は『宗長聞書』で「憐愍の心也。女はさるべき幸^{サイワイ}もあるならひなれば左様にも侍れかしとて、まづ、なりひらたち出て他人にかよひて見する也。」としている。つまり、これは男と女がお互いに幸福に暮らすために、まず業平が他人に通つて見せたのだと解釈し、主人公の業平がそんな浅薄なことをするはずはないと主張しているのである。⁽²⁸⁾なお、旧注の『伊勢物語惟清抄』(清原宣賢)においても「互ニ、イフカヒナキ体ニテ、アランヨリ、モロ共ニ、ヨキ方ニユカント也。」とある。これらの旧注ではいずれも、男は在原業平、女は紀有常女とし、『大和物語』一四八段を例に引いている。ここで、男に対する評価を一つの論点とすることができる。

〈論点1〉この男は「身勝手にひどい男」だろうか。それとも「思いやりのある男」だろうか。

前者だとすると、以後、大和の女と高安の女との対比が鮮明になるという点で物語の展開としては好都合である。他方、後者だとすると、男への評価は多くの高校生が「もろともにいふかひなくてあらむやは。」の現代語訳を通じて抱いたと予測される身勝手な男像から理想的な男像へと一変する。その反面、新注の『勢語臆断』(契沖、一八〇三年)の「男も女もかやうにたづきなくてあらんや、おのくしかるべき方につきなんと、男のかたよりいひ出て、高安郡のある富家のむすめにかよふなり。(中略)「もろともにいふかひなくてあらんやは」といふは、ことばをつ

くりてつきくしくいひなすなり。」という評言に留意する必要がある。つまり、男は、自分からそれぞれ適切な方法で事態を打開しようと言い出し、自らは新しく富家の女の所に通い始める。そして、そうすることが、このまま二人一緒に貧しい状態で暮らすより女にとつても（男にとつても）よい打開策なのだとまぐ女を丸め込んだのだと、契沖は男を指弾するのである。これは「浅薄な口先男」観と言える。

ちなみに、この部分を脚注で扱っている教科書をみると、例えば、(a)「(男は)一緒にみじめな暮らしをしていてよいものか」、(b)「ともに貧しく望みのない暮らしをしていられようか。いや、いられない。」とあつて、ここからだけでは男の真意を決定づけられない。なお、現代語訳に際しては、副詞「もろともに」、形容詞「いふかひなし」、助動詞「む」、連語「やは(反語)」に注意して訳出する必要がある。

改めて確認すると、男が高安の女に通い始める契機が妻の親の死による経済的困窮であることは明確である。しかし、事態の打開へと向かう行動を起こす契機となった男の心の中にあつたのはおのれだけだったのか、それとも、そこには加えて妻も存在したのか。そこで、『古意』の場合をみてみよう。傍線は筆者による。以下、同じ。

古へのならひにて、女の家にもこ住しけるに、女の父母なくなりて、まづしく、たづきなく成ぬれば、かくてのみあらんは、たが為もひとわろきぞとて、男は高安の女にも住んとてかよふなるへし。(中略) 大和物語に、大和かづらきの郡に住男有けり。此女かほかたちいと清ら也。年ごろ思ひかわして住に、女いとわろくなりければ、思ひわづらひて、かぎりなく思ひながら、めをまうけてげり。此今の女は富たる女になん有ける云々。是今にまたく同じ。此わろく云々は、まづしくなりしをいふ。

「是今にまたく同じ。」とは、『伊勢物語』二十三段の男が、『大和物語』百四十九段の男が「思ひわづらひて、かぎりなく思ひながら」というのとまったく同じだという意味である。つまり、男は経済的困窮に際し、思い悩んだ結果、もとの女（以下、本の妻）をこの上なくいとしく思いながらも、富裕な新しい妻を設けたのである。男としては、この行為によって本の妻の経済的負担が軽減され、二人の経済的破綻を回避することができるようになる。この点で、高野奈美氏が述べるように、男は、本の妻とこんな状態にいることはできないと心で思い悩んでいても、妻だけを見棄てるところにまでは至っていない。

以上、『古意』の真淵は、男が本の妻を気にしつつ、現実的判断によって新しい妻の所に通わざるを得なかったと解釈している。『古意』は「実情」を重視するがゆえに、旧注の業平像を結果的に受け継ぐとともに、男の内面の具体的真実を捉えているのである。このようなことから、これを「実情の男」観と呼んでおく。

(二) 本の妻の心理と行動

このもとの女、「あし」と思へる気色もなくていだしやりければ

この部分について『惟清抄』は「嫉妬スル気色モ、ミエザル也。」と外から見える様子を言うのに対し、新注の『伊勢物語童子問』（荷田春満）は「嫉妬する心もなき也。」と断言する。また、『古意』は「本のめ、ねたみ気もなくて装束など調じて暮ることに男を出したて、やる也。されど心のうち物あはれなれば、長目してをれり。」と詳しく述べる一方、新注の『伊勢物語新釈』（藤井高尚、一八一八年）は「あしと思へるけしきもなくて」とは言に出てうらみいはぬはもとよりにてと云意を「も」のてにをはにこめたり。」と係助詞の含意を解説する。

ところで、古語「あし」は本来、不快感を表す語である⁽³¹⁾。よって、この場面では、本の妻の心の中には、日が暮れると出かけていく男に対する不快な思いが当然あったはずである。にもかかわらず、この部分は、本の妻がその思いを言葉や表情、素振りとして外面に出すことなく、これまでと変わらない様子で男を送り出してやっていたと語っている。そこで、本の妻の心理と行動を一つの論点とすることができる。

〈論点2〉なぜ、本の妻（Ⅱ「もとの女」「大和の女」）は、男が新しい妻（Ⅱ「新しい女」「高安の女」）の所に通っていくのを不快だと思っている様子も見せずに送り出したのか⁽³²⁾。

先学の諸論考に基づけば、最初に「我慢説」が挙げられる。「もとの女」は何もいわない。いゝたくてもいえないのである。いえば、男は家をとび出したままかえらないかも知れない。自分は新鮮味はすでに微塵もない古女房である。親はすでにないひとりぼっちの女である。しかも、あゝ、自分は男を愛している。何物にもかえがたく愛している。我慢しよう。あの方が、こうしてこゝにわたしと一緒に住んでいてくださることだけに、せめて自分の小さな幸福を見つめていよう、女はこう考えき⁽³³⁾めている。つまり、本の妻は、男が新しい妻の所に通うとは分かっている、その苦しい思いを抑え、我慢しているものと解釈する。

次に、「諦観説」を挙げることができる。「男を自分の許に引き止めようとするのではもちろんないが、必ずしも積極的に他の女の所へ行くように勧めているのでもない。（中略）おそらく、伊勢物語の女の場合、男の面倒を見られなくなったことで、男の他の女への通いを認めざるを得ず、その諦観が嫉妬心を押えるように機能したものであろう⁽³⁴⁾。つまり、本の妻は「諦観」によって過剰な劣等意識と過度の嫉妬心とも無縁の心

の状態を保持していたため、そうであったと解釈する。

また、「信頼説」を挙げることができる。「女自身は、男のことを、自分たちのおちぶれた生活をたてなおすべく奔營する夫として、あくまで信頼しているものようである。男が高安の女に通うとは夢にも知らないらしい⁽³⁵⁾。つまり、本の妻はまったくの世間知らずで、男を疑うことさえも知らない純情な幼妻であるため、男をただ単純に信頼しているものと解釈するのである。

以上、「我慢説」「諦観説」及び「信頼説」を挙げたが、前者二説と後者の説とは相違点がある。そこで、本の妻をどのような人物として解釈するかを相違を一つの論点とすることができる。

〈論点3〉本の妻は、男が新しい妻の所に通っていることを知っていたか、知らないでいたか。

『古意』にある「本のめ、ねたみ気もなく装束など調じて暮ごとに男を出したて、やる也。」の通り、本の妻である大和の女は、夕方になると出かけていく男の行く先が新しい妻である高安の女の所であることを知りながら、嫉妬の素振りも見せずに衣服の着替えなど外出の支度を整えてやるのである。そうでなければ、この大和の女は当時の一夫多妻制（における経済的慣習）すら知らない、不自然なまでに世間知らずの「純情な」女ということになる。そもそも大和の女は結婚後、多年が経過して親も亡くなっており、この時点で「幼妻」どころではない。

ここで、本の妻の心理を一つの論点とすることができる。

〈論点4〉男の高安通いを知る本の妻は、経済的基盤もなくなり古女房と化した我が身が男から棄てられることを恐れるため、あるいは、

愛する男と一緒にいられる今の小さな幸福を願い守るため、心の中に覚えず湧き上がってくる不快な思い（嫉妬心）を抑え込み、堪え忍んでいたということになるのだろうか。

確かに、大和の女は「忍ぶ女」ではある。しかし、その内実は、愛する男を引き止めるための保身術といった類のものではない。仮に、弱い立場となった女が、愛する男から棄てられないために我慢して取り繕っているとするならば、経済的困窮がいざ男と女の愛を凌駕する（金の切れ目が縁の切れ目である）ことになるだろう。そして、第一段落で描かれた男と女の初恋の純愛物語はその輝きを失い、男に対する女の愛の質がその程度の軽薄で脆いものであったことになるとともに、自身への利己愛（男より我が身が大事）へと変質するだろう。さらに、それは、以後の女の行動や「風吹けば」の歌の内容も、結局は、女の自身への利己愛によるものであるということになってしまう。そのような女に対して男が「限りなくかなし」と思うことになるのでは、これはまさに女の思う壺の茶番劇といったことになる。

そうではなく、この部分はむしろ、愛する男を引き止める結果を招くことになる、大和の女からの男に対する実体のある信頼に基づく我慢であったと考えることが妥当ではないか。これは、先の「信頼」説でみたような純情すぎる幼妻による「実体のない、うぶな信頼」ではなく、相思相愛の初恋の成就、長年の連れ添いを背景とする古女房、いわば本妻による「実体のある、確かな信頼」というべきものである。³⁶ 第一段落で描かれた女は、幼なじみの隣の男を年頃になって初めての恋の相手として意識し、恥ずかしがっていた。だが、それを自分一人の心の内に秘め、親から勧められる縁談にはけっして承諾せず、男からのアプローチをひたすら待ち続ける。ここには、早くも「待つ女」「忍ぶ女」の形象化が見

受けられる。そして、待ち続けた男からの求愛の歌に対し、返歌の下句で「君ならずしてたれかあぐべき」と操を捧げる唯一の相手として男を定める。そこには、純情一途な女、芯の強い女の形象化がある。同時に、そこには幼なじみの男の人となりのすべてを理解している女を窺い知ることができる。そういう基盤を持ち、長年を男と一緒に暮らしてきた大和の女にとっては、経済的基盤が崩れたために男が新しい女の所に通い始めても、互いに言葉で確かめなくとも、女には、男の思いや考えなどすべては十分に理解しているという強い思い、男を信じ切る「信念」があるとと言える。したがって、女には、たとえ自身の心にあの不愉快な思い、嫉妬心が生じてきたとしても狼狽することなく抑え込み、男を信頼することができ、平然と男の不安通いの支度を整え送り出してやることが可能なのである。これを「信念」説とする。

（三）男の心理と行動

男、「異心ありて、かかるにやあらむ。」と思ひ疑ひて、前裁のなかに隠れゐて、河内へいぬる顔にて見れば

男は「あし」と思う様子もなく我が身を送り出す大和の女に対して、自分以外の別の男を愛する「異心（二心）」があつてそのような振る舞いなのかと思ひ疑う。そして、この男の心理は「前裁のなかに隠れゐて、河内へいぬる顔にて見」という行動へと衝き動かす。松尾聰氏は、この男について、「チラツと心をかすめたのは、いまわしい疑惑である。（中略）腕こまねいてひとり考え込んだあげくの計略が、出るとみせかけて、隠れてうか、う、まことに卑劣なそれである」と弾劾する。³⁷ 実際の、この男の心理と行動は「もろともにいふかひなくてあらむやは。」の節で挙げた「身勝手ひどい男」観と呼応する。しかし、松尾氏は、男について

「たゞ、そうした卑劣な手段をもつてしても敢えてたしかめたかつたのは、妻への愛情が、愛人への愛情とけじめをつけつゝ、そのまゝ、ちゃんとのこつていたからであろう」と続ける。確かに、男は女の「異心」を疑い、卑劣な手段を講じて女の様子を窺った。しかし、それは、男が、経済的困窮に追い込まれて以降も女への愛を変わず持ち続けているながらも、女がそうであったようには、つまり、初恋の女、長年連れ添ってきた大和の女による自身への愛を信じ切ることができなかったからにほかならない。関根賢司氏の言を引けば、「男は、いつだって意志薄弱で、疑い深いが思慮が浅く、傷つきやすい繊細な魂をもてあましているだけの日和見主義者で、主体性にとぼしい」³⁸のである。この男は、「身勝手にひどい男」「浅薄な口先男」「思いやりのある男」と見なすべき面が認められる一方で、生活の経済的困窮の危機を新しい妻の所に通うことではか打開できない「ふがいない男」であるとも考えることができる。すると、このふがいない男は、いとし妻の心をも疑ってしまうという現実的な側面を持つ「実情の男」として描かれているとも言えることになる。

(四) 大和の女の行動と歌

この女、いとう化粧じて、うちながめて、風吹けば／沖つ白波／たつた山／夜半にや君が／ひとり越ゆらむ と詠みける

男を見送った後、大和の女は、念入りに化粧をして、物思いにふけりながら外をながめる。この場面で、女は、なぜ化粧をしたのか。この点については従来、先学の諸論考で論点となり、多く論じられている。そこで、これを論点として取り上げることができる。

〈論点5〉男を見送った大和の女が「いとう化粧」をしたのはなぜか。

議論の背景には、これまで、二十三段と関連付けて研究されてきた『古今和歌集』巻第十八雑歌下九九四番歌の作歌事情を物語る左注がある。そこには、「月のおもしろかりける夜、河内へいくまねにて前栽の中に隠れて見ければ、夜ふくるまで琴をかき鳴らしつうち嘆きて、この歌をよみて寝にければ」とあり、この場面で女は琴を弾いている。また、『大和物語』一四九段には、「はしにいであて、月のいとみじうおもしろきに、かしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまで寝ず、いとううち嘆きてながめければ、「人待つなめり」と見るに、使ふ人の前なりけるにいひける。」とあり、そこでは女が髪をくしけづっていることがある。当時の「化粧ず（化粧をす）」とは、白粉・紅や鉄漿などをつけて顔をよそおい、また、身づくろいすることである。³⁹それが、この部分には「いとう化粧じて」とあるため、当然、通常以上の長い時間がかけられていることが明らかで、これにより長い化粧の間に女の心に浮かぶ思いもさまざま——それらは現状のみならず来し方行く末と広がり、時に深く時に乱れ狂うもの——であったと推察される。

さて、女がたいそう念入りに化粧をした理由について、田口尚幸氏の整理を参考にすれば、次のような説を挙げることができる。①男の帰宅に備えてのことと考える説⁴⁰、次に、②女の身だしなみ、品の良さを表すとする説⁴²、また、「化粧」を呪的行為と捉える点で共通するが、それを通じて、③男の無事を祈るとする説、④男の魂を招くとする説、その他、⑤懸想説、⑥無意識説、⑦女自身の魂鎮め説、⑧衝動的行為説がある。これらを大別すれば、女の男に対する強い思いを背景とするもの(①)と、⑤、⑧とそうでないもの(⑥⑦)になる。

ここで、逆に、女への疑いを持つ男の側から、「化粧」に関するこれらの説を検討してみたい。すると、例えば、①⑤⑧の場合、自分ではなく、別の男のために行う化粧と解する可能性が強い。②の場合も①と同様に

別の男のための行為と解する可能性がある一方、この後の女の独詠の前触れ行為と解することもあり得る。③④の場合、この時点で男は自身が抱いた疑いに疑問を持ち始めると解することができ、女の真意に気づく契機ともなり得る。⑥⑦の場合では、女の化粧は男にとってまったくの不可解な行為ということになるだろう。

（続く）

『伊勢物語』の注釈書の引用は、竹岡正夫『伊勢物語全評釈 古注釈十種集成』（右文書院、一九八七年）に拠る。ただし、注釈書の古注、旧注、新注の範疇は、それとは別に、大津有一『伊勢物語古註釋』（宇都宮書店、一九五四年）に拠った。

注

- （1）文部科学省『高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）解説』国語編（東洋館出版、二〇一八年）一五頁、一六頁、一九頁。
- （2）「これ〔筆者注：「不詳」の語〕は、入門期の漢文指導にも関係づけられ、かつ（いまはまだわからないが、そのうちわかるかもしれない。いや、わからずにはおかかない。）といった学問的良心と後進に期する気持ち——と説くことにしている」。秋友義昭『伊勢物語「筒井筒」の指導』（『国文学解釈と教材の研究』一九一六、一九七四年）。一七〇頁。
- （3）「これ〔出典の記述〕を好材料として、本文校訂の仕事や学問的良心についても、話しておく」。注（2）秋友義昭氏論文。一七一頁。
- （4）河地修「やまと歌の系譜——総論としての『伊勢物語』作品論の試み——」（『文学論藻』六一、一九八七年）。二五頁。
- （5）時間の推移を重視すると、四段落（A(1)・A(2)・B・C）と捉えて、「起承転結」の物語として扱うことも可能である。

- （6）「教材としての割愛版筒井筒章段は、少なくとも『伊勢物語』を扱うための教材としては、さまざまな点で問題があり、不適切なものであるといえる」。松島毅「『伊勢物語』筒井筒章段教材論——その二種類の版と扱い方をめぐる問題について——」（『新時代の古典教育』学文社、一九九九年）。二八頁。また、「国語総合」教科書（平成二八年度）の中で、第一段落と第二段落のみの採録は、三省堂308、大修館書店314、数研出版317である。古本理恵「高等学校における古典教材の研究——『伊勢物語』「筒井筒」の場合——」（『論叢国語教育』127九一九〇、二〇一六年）。七九頁。
- （7）渡辺実『新潮日本古典集成』（新潮社、一九七六年）。一三頁。
- （8）「旧都のあった大和だけは特別扱いされていた様子だが（初・二十・二十三段など）、他は徹底的に軽視され、田舎のものは田舎の人間であるがゆえに、きびしく否定されねばならなかった」。注（7）渡辺実氏前掲書。一四六頁。
- （9）「「ゐなか」に該当する」地名が全て畿内の諸国のものであることに注目しておきたい。思うに、それは伊勢物語作者の強烈なみやび意識・都意識ともかわつていいるのではなからうか（四五頁）。「ゐなかわたらひ」ということさらな言い方は、京を本貫とするものがそこをはなれて田舎に住むことを意識しているものと思われる」（四六頁）。仁平道明「ゐなかわたらひ」考（『解釈』二八—一一、一九八二年）。
- （10）羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成研究篇』角川学芸出版、二〇〇七年）。
- （11）窪田裕樹「物語絵から読む『伊勢物語』——教材としての可能性——」（『教育デザイン研究』7、二〇一六年）。
- （12）「係り結びの「こそ」＋已然形に注目することで、男の「女を得たい」という思いの強さが確認できる」。注（6）古本理恵氏論文。八五頁。
- （13）井上次夫「係り結び」の呼応の指導——静止性と力動性の観点から」（『月刊国語教育』八一—一一、東京法令出版、一九八九年）。一一五頁。

- (14) 「これらの「係」助詞は、格助詞や接続助詞とはちがって、それがなくては文意が通じないというものでは、元来、なかった。つまり、文法的であるよりは、むしろ感情価値に関係する修辭的な性格を、本来、持つものであったと言える」(二四九頁)。「一般に「ぞ」を含む文が、自己の立場を持しながらも比較的冷静なのに対し、「こそ」による強調は、より一途な感じを伴うとも言えようか」(二四四頁)。「なむ」が相手に語りかけ、解説しようとする態度を示すのに対し、「こそ」は、むしろ、自己の判断を強調するのに急である、という相違点があるように「思われる」(二四三頁)。阪倉篤義『日本語表現の流れ』(岩波書店、一九九三年)。
- (15) 竹岡正夫『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』(右文書院、一九八七年)。四九二頁。
- (16) 山口仲美『言葉から迫る平安文学2 仮名作品』(風間書房、二〇一八年)。九頁、一七三頁。
- (17) 注(14) 阪倉篤義氏前掲書。
- (18) 白鳥藍氏は、「あぐべき」の解釈上の問題として、髪上げを誰のために行うのか、誰が女(妻となる人物)の髪上げを行うのかを挙げ、古注釈を比較・考察している。「伊勢物語」二十三段論——古注釈と近代注釈の比較から——『国文目白』五三、二〇一四年)。
- (19) このような注釈書からの引用文を授業で紹介することは、古典文学の享受・受容史の観点からみて有用である。
- (20) 「男の方から幼い頃の鄙びた遊びの体験を詠み込み、婉曲に自己の心情を臚化した愛の歌が贈られてくる」。市原愿「伊勢物語二十三段攷」『平安文学研究』五四、一九七五年)。三六頁。
- (21) 「女の返歌も(略)「君ならずして誰かあぐべき」と明確に自己の感情を出して男の微温的な打診に応じている」。注(20)市原愿氏論文。三六頁。
- (22) 注(6) 古本理恵氏論文。八二頁。
- (23) 河地修「伊勢物語「筒井筒」章段考——化粧する女、あるいは没落貴族のこと——」『文学論藻』六四、一九九〇年)。一三頁。
- (24) 注(20)市原愿氏論文。三六頁。
- (25) 片桐洋一「鑑賞日本古典文学5 伊勢物語・大和物語」(角川書店、一九七五年)。一〇二頁、一〇三頁。
- (26) 高野奈未「近世における『伊勢物語』二十三段の読解——旧注から『伊勢物語古意』へ——」(『國語と國文学』八八―五、二〇一一年)。一二頁。また、『日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』『日本古典文学大系』『伊勢物語全釈』『伊勢物語評解』は「男が元の女と相談して決めたのではなく、自身の貧しい生活だけを考えて行ったことだと解釈している」。注(18)白鳥藍氏論文。一〇〇頁。
- (27) 秋山虔「伊勢物語私論——民間伝承との関連についての断章——」(『文学』二四―十一、一九五六年)。八頁、一三頁。また、「まだ若く生活力のない男は、二人の仲が経済面から崩れることをおそれたのである」。注(7)渡辺実氏前掲書。三九頁。
- (28) 青木賜鶴子「室町後期伊勢物語注釈の方法」(『中古文学』三四、一九八四年)。三八頁。
- (29) (a)は、三省堂『明解国語総合』(二〇一六年)。(b)は、桐原書店『国語総合』(二〇一六年)。
- (30) 注(26)高野奈未氏論文。八頁。
- (31) 「アシは、ひどく不快である、嫌悪されるという感覚・情意を表現するのが本来の意味。多くの人人が不快の念をいだくような害がある意から凶・邪・悪の意を表わした」(岩波『古語辞典』補訂版)。ただし、古本理恵氏は『古今和歌集』『大和物語』『十訓抄』などの「筒井筒」同話群に登場する女たちとの比較を行うことでより浮き彫りになるのだが、『伊勢物語』の女は良いか悪いかという善悪によって、別の女を設けるといふ男の行為を判断してお

り、「ねたげ」「つらげ」と感情的に表現される同話群の女たちとは全く異なる態度である。女は、男の行為を良いか悪いかの出来事として受け入れているのである」とする。注(6)古本理恵氏掲論文。八二頁。また、片桐洋一氏は「この元の女はそのことを悪いと思っている様子もなくて」(注(25)前掲書)、「この元の妻は、この男の行状を「悪い」と思う様子も見せずに」(『伊勢物語全読解』和泉書院、二〇一三年)と現代語訳している。その訳でこの部分を解釈した場合、本の妻の人物像について理性的判断(善悪)と感覚・情意(快・不快)との区別に基づく新たな解釈へと発展する可能性がある。しかし、それは本稿の「あし」の理解とは異なるため、これ以上は触れない。

- (32) そもそも本の妻は、『童子』が注釈するように、実は、内面でも男への嫉妬心もなく男に愛想を尽かしているのではないかと考えてみると、以後の女の行動や歌との辻褄が合わなくなる。また、「あし」と思える気色もなくて」の「気色」の意味は「人の、ほのかに見える機嫌・顔色・意向」(岩波『古語辞典』補訂版)である。よって、ここでは、「さりけれど」と「気色もなくて」を用いて、作者が判断する「もとの女」の内面の実際(「あし」が外面の様子(「気色」として観察できないこと、すなわち、内心と外見との食い違いを述べているのである。この結果、男は(作者や読者と同様に)その食い違いに疑心を抱くことになる。

- (33) 松尾聰『伊勢物語』(アテネ文庫二六一、弘文堂、一九五五年)。一七頁。また、市原愿氏は、「松尾聰氏が妻のこころの屈折を精緻に解明された如くであり、大和物語の文学的鮮度は落ちるが、「心ちにはかぎりなく心憂しとおもふを忍ぶるになむありける。」と敷衍されるべき必然性を担っていると解されるのである」と述べている。注(20)市原愿氏論文。四一頁。

- (34) 吉山裕樹『伊勢物語二十三段について——筒井筒・立田山の物語——』(『年報』七、比治山女子短期大学、一九八九年)。二九頁。

- (35) 注(27)秋山虔氏論文。一〇頁。

- (36) こちら「大和の女」は動揺の色をみせてないという。その理由は最初に語られている恋の成就のいきさつであつたかもしれない。親の言にも従わず自分の意志を貫く確固たる姿勢は、男の心が戻ってくることを信じて疑わない女の心の強さと繋がっているだろう」。安藤亨子「伊勢物語の女たち」(『一冊の講座 伊勢物語』有精堂、一九八三年)。三二七頁。

- (37) 注(33)松尾聰氏前掲書。一八頁。

- (38) 関根賢司「化粧考」(『國學院雑誌——伊勢物語を読む——』八六—七。一九八五年)。五二頁。

- (39) 「けさう」は、古くは美容の為のことではなく、儀礼としてすることであり、神事をする際などのものであつた。これも男の無事を祈る為のことであつたと取れる。窪田空穂氏『伊勢物語評釈』(東京堂、一九五五年)。九〇頁。また、「歌が、歌の言葉が、呪的な力を秘めて(いると考えられて)いたように、(A)化粧も、(B)音楽も、ほんらい非日常的なハレの世界にぞくしている行為として、その呪的な機能が期待され、信じられていた」。注(38)関根賢司氏論文。五六頁。

- (40) 「美しく粧っているのは男の出かけた後のことと物語はいう。これはどう解すべきだろうか。それは男の帰宅に備えてのことだと考えてみたい」。注(36)安藤亨子氏論文。三二七頁。また、「男の留守に化粧する女の真情にも留意せねばなるまい。女の用心意は、夫のためのものであつたことはいまでもないことである」。杉山英昭「筒井筒章段」(『一冊の講座 伊勢物語』有精堂、一九八三年)。三六四頁。

- (41) 注(7)渡辺実氏前掲書。四〇頁。

- (42) 森本茂『伊勢物語全釈』(大学堂書店、一九七三年)。一七二頁。

- (43) 窪田空穂『伊勢物語評釈』(東京堂、一九五五年)。九〇頁。

- (44) 注(38)関根賢司氏論文。五九頁。

- (45) 田口尚幸「伊勢物語」二三段第二・三部の解釈」(『文学研究』七五、一九九二年)。六頁。